

ローカルな活用を広げるマッシュアップ型メディア



中村 美子

ツイッターは、シンプルで自由度が高いこと、APIを公開してマッシュアップを容易にしたことで豊かな展開を生み出した。オルターナティブ・メディアとしての評価も見逃せない。地域住民が情報発信やPR、情報共有にグループマップやツイッターを普通に使うようになっていく。

ソーシャルメディアとしてのICTを考えると、ひとつの切り口として、サービスをオール・イン・ワン型か、マッシュアップ可能なパーツ提供型か、という点で見ることができ

る。ミクシィやフェイスブック、地域SNSなどは、ユーザー間のコミュニケーションを促進するために、日記や写真、足あとやコメント、コミュニティ作成など多様な機能を備え、そこにいけば何でも揃う百貨店のようなサービスを提供している。

もう一つが、APIを公開する方法も含めて、ユーザーに使いこなしをオープンに考えてもらうタイプ（代表的な例はグループマップやツイッター）。

ラインを情報収集やニュースサイトのようにつけていく人、「自分メディア」として情報発信に使用する人もいる。一時期「津田」という言葉が流行ったが、現場での実況中継的な使い方もある。マスメディアを補完し、そこで伝わらない情報を伝えるオルターナティブ・メディアとしての評価も見逃せない。

ローカルなコミュニティとしての活用可能性という面でも自治体や地域住民が地域の情報発信やPR、情報共有にグループマップやツイッターを使うのはごく一般的になってきた。

また、このような使いこなしの面もさることながら、API公開によって、新しいサービスを制作・提案できる点が大きな魅力である。

既存の利用可能なプログラムや、APIを組み合わせたマッシュアップ型のメディアの制作であっても、一定のシステムやプログラム、ミンクに関する知識が必要だが、一から同じ機能をつくり出すことを考えれば、当然ながら、はるかに敷居が低い。

ある程度専門的な知識のある人材が確保できれば、位置情報や人々のつぶやきを活用して、地域密着型のサービスが可能になる。これはローカルなニーズに応える情報デザインを考える上で重要な変化である。

すでに観光案内や史跡めぐり、交通情報など、各地でこのようなサービスが活用されている。

ツイッターやグループマップに限らず、従来からAPIを公開するケースはあったが、ユーザーが開かれた開発は、ソフトウエア・アプリケーション全体の流れでもあり、今後いっそう加速する方向にあると考えられる。

なかむら・まさこ 東京都大学環境情報学部教授。主要な関心・テーマは地域・コミュニティやユーザからみたメディア・情報システム。京都大学博士（人間・環境学）。